

宮城県・私立東北学院中学校・高校

魅力的な学校づくり

特色あるコース制の導入と PDCAサイクルの確立で、 生徒の希望進路を実現

変革のステップ

背景と課題

- 他校の台頭などにより、中学校の入学希望者が減少し、生徒の学力にも課題が見られるようになった
- 同校の中学校からほかの高校への進学者が増えた

実践内容

- **高校のコースの改編** 生徒の希望進路や高校生活の志向に応じた「特別選抜コース(中高一貫)」「特別進学コース」「総合進学コース」「東北学院大学コース」の4コース編成とした
- **探究的な学びの場「3L希望学」の設置** 1人1台のノートパソコンを配備し、「持続可能な開発のための教育」(ESD)を軸にした中高一貫の探究活動「3L希望学」を始動
- **PDCAサイクルによる効果検証** 「人間形成部門」と「学力形成部門」の2本柱で、数値目標や学校目標の達成度を検証するPDCAサイクルを整備

成果と展望

- 新設の特別選抜・特別進学の両コースで成績上位層が増加。主体的な学習態度も涵養されつつある
- 教師間に学校全体で改革に取り組む意識が定着

宮城県仙台市に位置する私立東北学院中学校・高校は、キリスト教精神に基づく全人教育を推進している。その一環として、ユネスコスクールへの加盟を視野に入れ、「持続可能な開発のための教育」(ESD)に力を入れている。市内の私立中高一貫校として人気を誇っていた同校だが、ほかの私立高校の躍進や公立中高一貫校の台頭などにより、2000年代に入ってから入学希望者が減少するとともに、学力に課題のある入学者が増え、大学進学実績も伸び悩むようになった。そうした状況に危機感を抱く教師たちが中心となって対策を立てたこ

高校教育の質の向上を目指し、 指導の体制と内容を見直す

PROFILE



仙台神学校として開校。「LIFE (いのち) LIGHT (光) LOVE (愛)」を学校標語とし、福音主義キリスト教の信仰に基づいて「個人の尊厳の重視と人格の完成」を目指す。「持続可能な開発のための教育」(ESD)を推進中。

設立 1886 (明治19) 年

形態 全日制/普通科/男子校

生徒数 1学年約360人

2017年度入試合格実績 (現役のみ) 国公立大は、北海道大、東北大、宮城教育大、筑波大、千葉大、東京外国語大、九州大、宮城大などに79人が合格。私立大は、岩手医科大、東北学院大、上智大、中央大、早稲田大、同志社大、川崎医科大などに延べ431人が合格。

住所 〒983-8565
宮城県仙台市宮城野区小鶴字高野123-1

電話 022-786-1231

Web site <http://www.jhs.tohoku-gakuin.ac.jp/>

ともあったが、抜本的な解決が難しいまま、15年度中学校入試では開校以来、初の定員割れに至った。

そこで、全校体制での改革を図ろうと、大橋那一校長は、15年3月に全教師が出席する緊急懇談会を開いた。募集広報や入試制度といった様々な観点から現状が分析される中、重要課題として位置づけられたのが、高校教育の質の向上だったという。岩上敦郎副校長は次のように述べる。

「本校の中学校からほかの高校に進学する生徒が増えている実態があり、それは、学校全体の大きな課題だと受け止めました。中高



宮城県・私立東北学院中学校・高校校長
大橋那一 おおはし くにかず
教職歴24年。同校に赴任して5年目。「生
学問、一生求道」

宮城県・私立東北学院中学校・高校副校長
岩上敦郎 いわかみ あつお
教職歴28年。同校に赴任して29年目。「敬神
愛人を実践する生徒の育成を目指す」

宮城県・私立東北学院中学校・高校
小松光信 こまつ みつひぶ
教職歴29年。同校に赴任して30年目。進路指
導部長。「CARPE DIEM(その日を摘
め)」

宮城県・私立東北学院中学校・高校
柴田隆一 しばた りゅういち
教職歴26年。同校に赴任して27年目。教育研
究部長。「生徒が言葉と仲間の力を信じるこ
とができるようにかかわっていくこと」

接続をきちんと機能させるためにも、高校での指導の体制と内容を見直し、生徒の希望進路に応えられる学校に生まれ変わらなければならぬと考えました」

生徒の進路意識に応じて 高校のコースの特色を図る

学校改革の柱と位置づけられたのが、17年度に行った高校のコースの改編だ。以前は2年次から文理別にコースを分けていたが、生徒の希望進路や高校生活への志向にきめ細かく応じられるよう、高校入学段階から4コース編成とした。難関国公立大学や医学系大学への合格を目指す「特別選抜コース(中高一貫)」と「特別進学コース」では、授業時数を増やし、放課後補習も必須とする。地域社会に貢献できる人材の育成に重点を置き、難関大学への合格を目指す「総合進学コース」と、東北学院大学への内部進学希望者を対象とする「東北学院大学コース」では、文武両道の実現を図り、多様な進路に対応できるカリキュラムを策定している。コースの改編を主導した進路指導部長の小松光信先生は、こう述べる。

「本校がどのような生徒を育てたいのかが分かるよう、コースごとに特色を打ち出しました。また、学力によって振り分けるのではなく、生徒が自分の希望や志向に合ったコースを選択できるようにしました。自己実現につながると感じることで、生徒の主体性は高

まると考えています」

コース制の導入とそれに伴うカリキュラム改編について、現在の教師数で対応できるのか、施設・設備は十分なのかといった観点からも議論された。実際、選択科目の増加などにより、教師の増員や教室の確保などが必要だったため、大橋校長は学校法人東北学院の理事会で予算の引き上げを求めたと話す。

「理事会の構成員の大半は東北学院大学の教員なので、高校の改革の目的と必要性を理解してもらえよう、かかる費用を具体的に示しながら、何度も粘り強く交渉しました。そうして最後には賛同が得られ、予算を確保することができました」

ICTの活用で 探究活動の充実を図る

「総合的な学習の時間(以下、「総合学習」)の改善にも力を入れている。高校では、以前から、同校の学校標語「3L」(LIFE・LIGHT・LOVE)とESDをテーマとする進路学習を「総合学習」の中心に据えていたが、16年度からは中高一貫の「3L希望学」へと改編。環境・貧困・平和といった多様な視点から、持続可能な社会を創造するための方法を探究することにした。中学校では、身近な環境問題や国内外の職業事情について学んだ上で、シンガポール研修と関連づけた異文化理解教育に取り組む。また、卒業研究として、生徒個々の関心

に応じたテーマで研究・発表を行う。高校1年次には、世界に目を向けて、格差や貧困といった課題について理解を深め、2年次には、戦争などの日本の歴史について調べてから、平和の実現に向けて何ができるかを考える。そして3年次には、生徒自身の将来のビジョンを実現するために必要な手段を研究し、現実の進路に近づけていく。

改編にあたっては、ESDについて改めて全教師の理解を深めるため、専門家を招いて講演会を開いた。そして、生徒がESDの視点を進路選択に結びつけられるよう、教師間でカリキュラムの検討を進めていった。教育研究部長の柴田隆一先生は、次のように語る。

「中学校では身近なフィールドから学び始め、生徒が自分で課題を設定して探究活動を行い、高校・大学進学後にもさらに研究を深めていけるような流れを想定しました。漫然と進路を選ぶのではなく、なぜそこに行くのか、何を学びたいのかを明確にして進路を選択してほしいと考えています」

本格的な探究活動が可能となった背景には、ICT環境の整備がある。16年9月に生徒1人1台のノートパソコンを配備したことにより、資料集めや情報共有が容易になり、「総合学習」の改善が促進されたという。

「スライド作成などのスキルが高く、ICTを用いた発表が上手な生徒もいます。分からないことがあれば、面識のない生徒同士で

も抵抗なく質問したり、情報を共有したりします。ICTの導入によって生徒同士の交流が濃密になっただけでなく、教師は想像以上に生徒の表現力やコミュニケーション能力が高いことにも気づかれました」(柴田先生)

活動の成果物は、「Classi」(※1)に記録し、いつでも確認できるようにしている。現在は、20年度の大学入試改革でも重視される多面的・総合的の評価を見据え、生徒個々の情報を蓄積している段階だが、将来的には生徒が自分の活動を振り返り、次の探究活動の視座をどこに置くのかを考えたり、進路選択の材料にしたりする活用法を想定している。

指導力の継続的な改善に向け、PDCAサイクルを確立

教育の質を高めるためには、指導の課題を継続的に洗い出し、それに応じて改善していく必要がある。そこで、同校では、「人間形成部門」学力形成部門」の2つの組織を中心に、PDCAサイクルの構築に取り組んでいる。

人間形成部門では、同校の中期計画である「21世紀にチャレンジする学院ボーイズ」Global Citizenをめざして」の実現に向けて、コミュニケーション能力やリーダーシップ、発信力、グローバル人材に必要な資質・能力の伸びなどを検証する。評価システムの整備は発展途上だが、学校独自のループリックと、ベネッセの「GPS-Academic (※2)」(以下、「GPS」)

などの外部指標を組み合わせることで行っている。独自のループリックは、生徒が自分の成長を可視化するとともに、教師が取り組みの成果を検証するツールとして活用している。一方、GPSは、高校2年生の12月に実施する。

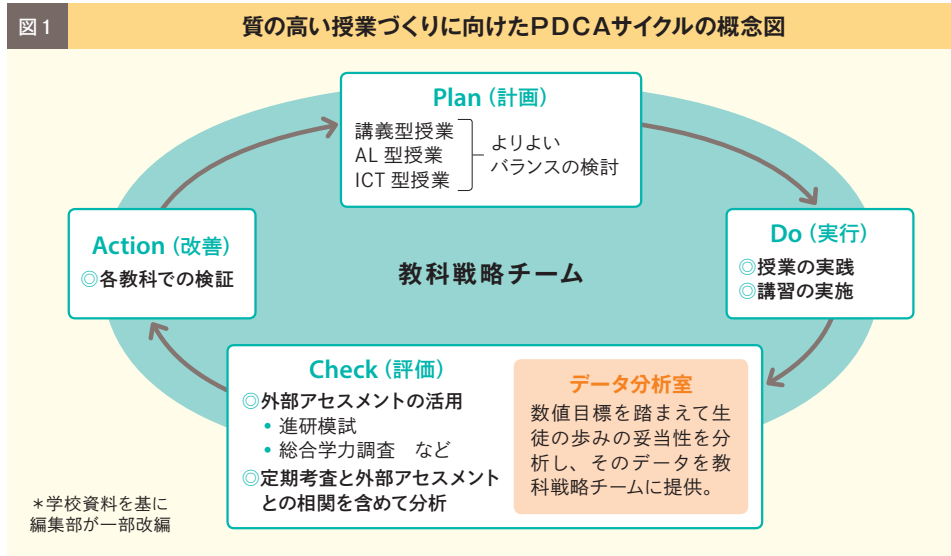
「GPSの受検を通して、中学1年生からの探究活動の成果を客観的に測るだけでなく、どのような力が社会で求められるのかを体験的に学ばせていきたいと考えています」(柴田先生)

学力形成部門では、進路指導部や教務部、教育研究部などの教師、教科ごとに設けられた教科戦略チームの教師が所属し、教科学力の検証を担う。教科戦略チームは、各教科4人から成り、模試の結果から分野・単元ごとに課題を洗い出し、具体的な指導改善の方法をまとめる。その内容は、学力形成部門でさらに検討・改善され、学校全体に共有される。新たな予算措置が必要な場合や、学校全体にかかわる事柄については、副校長、教頭、各部長から成る「総合改革室」でも検討する。

以前は、学年団に所属する進路指導部の教師が模試などのデータを取りまとめていたが、組織的にPDCAサイクルの確立を図るため、進路指導部内にデータの整理・分析を専門とする組織「データ分析室」を設置し、そこでの分析結果を教科戦略チームに提供することにした。

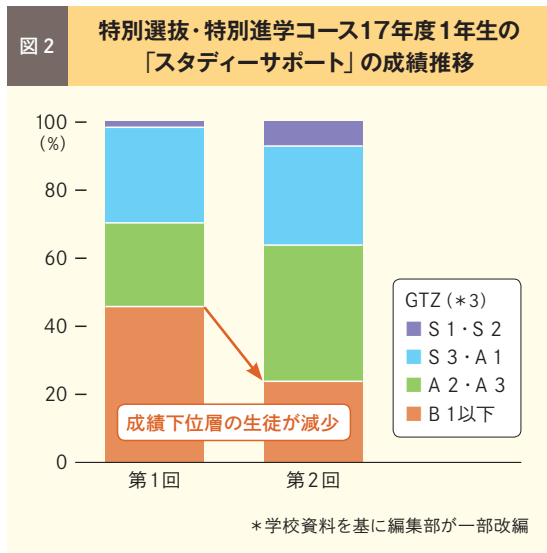
「学年団という枠を超え、学校全体を俯瞰できる環境を整えたいという思いがありまし

* 1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。
* 2 ベネッセの教材の1つ。問題発見・解決に必要な3つの思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。



た。そうすれば、思い入れやイメージにとらわれず、公平に現状を分析しやすくなり、実効性の高い指導改善につながると考えました」（小松先生）

例えば、質の高い授業づくりを目指し、コースごとにベネッセの「進研模試」を始めとするアセスメントの目標値を定め、それが達成でき



17年度に始まったコース制は早くも成果を上げつつある。特別選抜・特別進学の両コースでは学力向上が著しく、ベネッセの「スタディーサポート」の結果では、成績上位層が厚くなり、

コースの魅力を高めていきたい

「コースの特色をさらに打ち出し、学校の魅力を高めていきたい」（小松先生）

17年度に始まったコース制は早くも成果を上げつつある。特別選抜・特別進学の両コースでは学力向上が著しく、ベネッセの「スタディーサポート」の結果では、成績上位層が厚くなり、

しているかどうかを組織的に分析し、学校全体の教科指導力の向上を図っている（図1）。

「教科指導はどうしても個々の教師の力量や努力に負うところが大きくなり、目標の達成をすべて個人の責任に委ねると、批判が個人に向けられ、学校がバラバラになりかねません。教科全体が組織として責任を持つことができる体制を整備したいと考えました」（小松先生）

下位層の生徒が減少している（図2）。

「生徒が、学習中心に取り組むコースであるという覚悟を持って自らコースを選択し、だからこそしっかり学びに向き合えた結果だと思えます。成果が出たことで、生徒の顔つきも明るくなりました。教師に指示されて取り組む『勉強』から、自分たちで取り組む『学習』に転換しつつあると感じています」（小松先生）

全校を挙げて改革にあたる重要性が教師間に浸透したことも、大きな成果と言えるだろう。若手を中心に、率先してアイデアを出す教師が増え、分掌間の交流や情報共有も進んでいる。

「学校改革には管理職のマネジメント力が大切だと言われていますが、学校を変えていく原動力は、何といたっても現場で陣頭指揮にあたるミドルリーダーの力です。小松先生や柴田先生のような、豊かなアイデアを持っている先生方に先頭に立ってもらったことで、改革が一気に動き始めました」（岩上副校長）

今後は、文武両道をうたう総合進学コースと東北学院大学コースの特色化に力を入れ、取り組みを充実させていく。

「地域や大学でリーダーシップを発揮できる力を育成していく必要性を感じています。学校設定科目や東北学院大学との高大連携などを効果的に活用しながらコースの特色を明確にし、学校の魅力をさらに高めていきたいと考えています」（大橋校長）

* 3 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標。「S1」～「D3」の15段階がある。